



プロフェッションとしての研究者

原山 優子



平成21年1月12日、仙台市の成人式へ参列する機会を持ちました。エネルギーに満ち溢れた会場には、平成生まれの成人の輝かしい顔。「彼・彼女らが自らの手で切り開く人生とは?」、「この中の何人が研究者になるのだろうか?」と想像するとともに、遠ざかった二十歳の自分を思い起こすきっかけとなりました。

当時の私は、フランスのブザンソン大学で数学に没頭していた時期にあり、また結婚を頭の片隅に置いたころでもありました。その後、過去に囚われることも、先を読むこともなく、その時その時の体験を味わいつつ、40年近くが経過し、現在、東北大学の工学研究科において科学技術政策論を担当する一教員として過ごす日々が続きます。

これまで歩んできた道を振り返ると、プロフェッションとして研究者の道を選択したことになりますが、当初から計画したキャリアパスは不在でした。とは言え、いくつかの分岐点が存在し、そこではその後のキャリア・生き方に大きなインパクトを与えることになる意思決定を行ってきたことに気がつきます。ただし、これはあくまでも結果論であり、当時はその意味を知る由もありませんでした。

昨今、博士号取得者のキャリアパスの多様化、研究者の流動化、研究職における女性の比率の拡大、分野融合型研究の推進などが政策課題となり、ひいては社会一般に認知される課題となりつつあります。また、これらの課題の中には、私自身あまり意識的にはありませんが、自ら実践し、あるいは体験してきたことと重なり合う部分が多々存在します。そこで、本稿では、私自身日々直面し、そして科学技術政策の論点としてあためてきた「プロフェッションとしての研究者」について、専門分野の選択、そして「女性である」という条件の2つの視点から再考することにいたします。

専門分野の選択

研究者であるということは体系化された学問分野のいずれかに帰属することを意味します。では、どの時点で、何を基準として研究者は自らの専門分野を選択するのでしょうか。

私の体験から申しますと、高校時代に興味を持った授業科目、そこでは担当の教員が醸し出す知を楽しむ雰囲気

気が大きく影響しましたが、その中から、成績も含む諸条件を踏まえて、専門分野として数学を選択しました。その後、30代になってから、再度学生として大学に復帰したときは、それまでの体験から社会問題として意識するに至った課題に向き合う手段を身につけたい、という動機が専門分野を選択する際の判断基準となりました。具体的には現行の大学システムに対する疑問から教育学を専攻したわけですが、その後、研究の分析枠組みを模索する中、たまたま経済学に巡り合い、それが持つ数学の香りに惹かれ、教育学と並行して経済学も専門分野と位置づけるようになりました。いわゆる「理系」の学問分野である数学から「文系」の学問分野である教育学に移籍し、「文系」とはいえ「理系」寄りの経済学に専門分野を広げたこととなります。現在に至っては、工学研究科に所属し、「理系」の世界の中で「文系」の調味料として機能しております。

過去の体験から専門分野の選択のカギを探ると、知的な好奇心、教科の成績、社会的課題の存在、分析枠組みの獲得が浮かび上がってきます。また、選択の時点は、高校生から大学生へ、社会人から大学生への移行時、そして、研究を進める過程で専門分野の複線化の必然性を感じた時となります。これが私の個別解ですが、以下では一般解の模索として「理系・文系」の切り口から考察します。

「理系・文系」の二分法は、学問分野の分類法として日本に浸透していますが、「理系の人間」あるいは「文系の人間」と称されるように、個人のアイデンティティーの分類法としても広く認知されています。また、労働市場においては、学歴、性別、年齢と並んで、格差をもたらす影の要因としても存在します。本稿にもすでに登場した語句ですが、何を持って「理系・文系」とするのでしょうか、そして、帰属の選択はどのようになされるのでしょうか。

理系・文系への分化は高等学校から、という印象を持ちますが、高等学校設置基準によれば「普通教育」と「専門教育」の二分法しか存在せず、また普通教育を取っても、制度的には理系・文系に区分されてはいません。よって、理系・文系への分化は制度上のものではなく、ファクトとして、大学進学を目指す際、便宜上の選択肢として「理系受験」と「文系受験」が登場する、ということ

がわかります。

さて、大学入学後の進路を「理系の学部」、「文系の学部」とあえて二分したとすると、獲得する専門性について、どのような差異が生じるのでしょうか。

知識の専門性という視点から「理系」と「文系」を比較すると、「自然および人造物」と「人を主体とした現象および創作物」と取り扱う対象を異にし、また概念、知識体系、研究手法、評価システムにおいてはさらに細分化された分野ごとに固有なものが存在します。しかし、専門性の基盤を成す論理的思考、分析能力、批判的精神、課題探求力、といった科学的思考の本質的な部分に何ら違いを見いだすことはできません。しばしば「理系進学者」は論理性に、「文系進学者」は感性に、それぞれ強みを持つとも言われますが、私個人の体験からすると、理系文系いずれも論理性と感性の両者を持ち合わせることなく専門性を極めることは難しいと考えます。また、科学技術の推進力として新領域、融合領域が台頭しつつある今日、明確な線引きをすることの意義はさらに薄らいでいくように思えます。

また労働市場に目を移すと、日本では慣習としてこの二分法がスクリーニングの手段として用いられてきました。明確な役割分担、固定化されたキャリア・システムが存在する場合は、この二分法による労働力配分にある程度合理性を見いだすことができますが、オープンでイノベティブな社会を目指すのであれば、このやり方は足かせとなりかねません。なぜなら、そこには、固定観念または既存の枠に縛られることなく創造性を発揮し、自らを取り巻く環境とインターアクションを取りながら社会的価値を生み出していく、言わば「理系・文系」の箱に収まらない人材が求められるからです。「理系・文系の呪縛」からの開放を唱える次第です。

「女性である」という条件

研究者の量的拡充と多様性の確保という視点から、政策課題として女性、若手、外国人の活用促進がうたわれるようになってから何年かが経過しました。また男女共同参画の動きも相成って、女性研究者の数を増やすべく、さまざまな制度、施策が導入されてきました。そして、その効果も徐々に出つつあるというのが今日の状況です。

「女性である」ということは、前述の専門分野と異なり、自ら選択することのできない与えられた条件であるわけですが、そもそも、研究者をプロフェッションとする際、「女性である」ことによる特異性は存在するのでしょうか。生物学的、脳科学的、人類学的、あるいは心

理学的、社会学的な見地からの議論はそれぞれの専門家にお任せすることにして、私の体験から申しますと、専門分野に、*ceteris paribus* の条件下で、ジェンダーによる向き、不向きに有意差があるとは思えないし、科学的アプローチに「男性流」、「女性流」があるわけでもない、というのが実感です。ただし、今日、個々の研究者が隔離された場所で研究を行うことは稀で、多くの場合何らかの組織に所属して活動することになり、そこでは構成メンバーが共有する価値体系、属性などに基づいてグループ・ダイナミクスが生じることになります。属性を共にする人同士にある種の連帯感、あうんの呼吸が発生することは自然な成り行きですが、多数派にこの傾向が強く見られる場合、当該属性を共有しない少数派の人々との調音が困難になることがしばしばあります。少数派への配慮と言う点からも、さまざまな機会を活用して、不協和音の存在を認める、不協和音を受け入れる、不協和音からハーモニーを引き出す、といった体験を重ねることが重要だと感じます。また、出産、育児といった子供との関わりにおいて、研究者であろうとなかろうと、母親の中核的な役割は不変のものと考えます。育児・家事に父親の協力を得ることができればそれに越したことはありませんが、なければならぬ、怪我の功名とでも申しましょうか、研究者として活動する際に大いに役立つスキルを身につけることができます。日々の生活から、必然的に限られた時間に複数のタスクを同時に遂行すること、そして問題解決にあたって多面的なアプローチを試みることを体得していくからです。

おわりに

昨年は複数の日本の研究者がノーベル賞に輝き、研究者というプロフェッションに社会の関心が集まりました。また、受賞者の方々のお話は、進路を模索する若い世代の方々にとって、研究者が研究者たる所以を感じ取る機会になったのではないのでしょうか。

最後に、プロフェッションとして研究者を、と考えている方々にメッセージを一言添えて、本論の締めくくりといたします。知的好奇心が原動力であることに疑いの余地はありませんが、それと同時に、与えられた枠を乗り越えることに、チャレンジし、それを楽しんでいただきたいと思います。その枠とは、自らが身を置く専門分野における研究のフロンティアであり、他の分野との境界線でもあります。特に「理系・文系」の枠は是非チャレンジの対象としてお考え下さい。そして、その境界線を越える手段として、自らとは異なる属性、バックグラウンドを持つ研究者とのディスカッションをお楽しみ下さい。